

シベリアの黒ダイヤ

和歌山県 坂本 清次郎

ソ連軍の侵攻。北都チチハルは一瞬にして混乱のつとと化した。童顔の少年兵に「ダワイ、ビストレ」と尻をたたかれての行軍。「チャスイ、チャスイ」と時計を取り上げ、左右の腕に数個の時計をはめた女子ソ連兵。チチハル憲兵隊の留置場は憲兵隊幹部の留置場に変わった。

チチハル憲兵隊全員、松花江の上流にて射殺されたとの情報が市中に流れているとか。そのはず三晩四日、松花江のほとりでソ連兵の監視下にあった我々、暗やみにまぎれ脱走する下士官、兵、みな憲兵腕章、襟章をもぎ取り、一般部隊へと接近することにした。

数日後、我々チチハル憲兵隊、同特務機関はやつと収容先の兵科部隊の宿舎に身を休めることができた。間もなく祖国日本へ帰れる日も近い。その前にハイラ

ル方面へ戦場整理に行くうわさも飛び交う。九月中旬、作業大隊が編成され、ソ連軍に留置された幹部を除く准尉以下の一部が、作業要員として編成される。

昂々溪を過ぎたころ、列車は我々の思いを裏切り、ハイラル方面へ乗り入れた。貨物列車を二段にした捕虜列車は満州里を越えソ連領内へ。

十数日間乗車して、バイカル湖を半日近く走り、クラスノヤルスクを経て、チャイナゴールスカヤの小市街へ着いた。元囚人用の宿舎に入り、南京虫に悩まされての毎晩が始まった。いよいよ作業要員としての身体検査。尻の大きい者は一級、二級にされて炭鉱作業要員に決定された。

生まれて初めての穴倉の中、日本の土木工学をもつてすれば、撫順炭鉱のように露天掘りにするような浅い炭鉱に思えた。キャップランプを頭に、木のはしご段を踊り場を通じて五、六回も下れば横穴であった。初めての地下、またその作業のスコップの大きいこと、トロッコの重たいこと。石炭満載のトロッコが脱線でもしようものなら大変である。人間一人ではとてもだ

めで、反対線路の空のトロッコを押してくる友を待つて、二人以上で線路に乗せるのが精いっぱいである。

ソ連の婦人が通りかかるものなら、彼女が「ヤボンスキ」、サルダート、セイノ、セイノ」日本の兵隊よ、セイノセイノの掛け声ばかりでは「ニイハラショー」(だめだ)と言って、トロッコの前に歯どめをして、尻でトロッコをグイと持ち上げ脱線直す。力と尻に、女からその脅威とコツを教えられ、覚えたものです。

来る日も来る日も地下、穴の中、三交代八時間労働もさることながら、幾つもの切り羽(採掘場)に分かれての仕事である。一か所の「切り羽」の上りが遅いと、みな脱衣場でゴロ寝して待つという毎日。一番方の勤務では朝日の昇らぬ間に採炭場へ。やっと地上に出ると、早や夕やみの中。全く日の目を見たことがなく、三番方になると朝日の輝かしい太陽に接することができるが、人間、夜眠る習慣に生きているのが通常であるのに、ここでは全くそれができない。

体のきついこと。夜たたき起こされての集合、点呼のつらいこと。仕事を終えて酷寒の中、営門前での点

呼。ソ連兵にかかつては、出発したときの人員と帰ってきたときの人数を数え合わせるのに一苦勞である。五列縦隊を何度も読み直す。足が凍るような痛さの中、我々の足踏みが続くのです。これが天国だと感ずるところとは地下が温かいこと。地上では零下三十度であるのに、地下では十八度から二十度と暖かく、石炭のきれいな黒光りする層を見ると、何と見事な黒ダイヤだなあと感服するのです。

また、良質の石炭の軽いこと、軽いこと。あの大きいスコップでの貨車積みも、なれてくれば苦にならず、わずかな酸っぱい黒パンと中身の無い水のようなスーブの食事だけで、よくこれだけの重労働ができるものだといながら驚く。

召集兵の方は年齢的にやはり作業がづらいようで、作業場へ行く足よりも重く、尻の皮がたるみ、首筋が細く見える。後ろの方から見ていると、あの人は危ないなあと思えた。別の日に、「おい、あの兵隊はその後どうした」と聞くと、必ず「死んだ」という返事が返ってきた。

抑留一年半もたったころ、日本兵捕虜ばかりの切り羽が与えられて、そこで採掘するようになった。気心の知れた日本人同士だ。切羽長は炭鉱長より信頼され、日本兵からも信望厚く優秀な人であった。希望者の多い中より選ばれて、この作業場で帰国の日を待ちながら、彼とともに炭鉱作業を続けた。

そのころからだれ言うともなく、この仕事も間もなく打ち切られるだろうとのうわさどおりに、我々の炭鉱作業は地上の作業になった。毎日々々、貨車で送られてくるドイツ製の石炭液化ガス工場用部品の積みおろしと運搬である。線路は野っ原に横たえた枕木につけたままのもので、その上を貨車を引っ張って走るとまる。貨物をおろし、貨車が後退する。線路のついた枕木を持ち上げ移動させれば、また列車が入ってくる。その繰り返しの毎日である。

野にアカザの青い色が目に冴える。アカザをゆでて浸し物にする。これはよい副食になる。食事は相変わらずの黒パンであるが、スープの中身が少し多くなり、汁腹にこのアカザの浸し物だから満足するが、翌日の

便が真っ青には驚く。

暖かくなり四月に入ると、本当のダモイ（帰国）がささやかれる。身上書のようなものを書き、一人一人面接があり、二、三日後に帰国の整列がかかった。整列後、名前を呼ばれた者は別の貨車に乗るよう指示があり、乗車。ダモイの途につく。翌朝、貨車の編成を見ると、指名された者の乗った貨車がどこかで切り離されたのか、一両不足になっていたが、そのまま列車は以前に見たバイカル湖畔を通り、一途東へ、それから南へと走った。道中、日本人捕虜の姿がチラホラ散見された。

ナホトカで約一か月。いつまたシベリアの奥地へ送還されるかもしれない不安の毎日であった。ようやく日本の船が……。日の丸の旗を掲げた船のタラップを踏んで、乗り入れて初めて、祖国へ帰れるのだという実感と慕情に身を包むことができた。

懐かしい山々、青い草木、舞鶴港が目に入る。白衣の看護婦さん、大勢の人々、のほりが林立する。岸壁のお母さんたちの姿が……。涙でかすむ。ああ、ついに

祖国へ帰ってきたのだとの実感がほのぼのと胸にし
み、熱い涙がほおをぬらした。

厳冬のシベリア、二度と行くことのできぬ、二年有
余を過ごしたあの炭鉱街。子供に伝えるべく、今、温
かく思い出として残る黒ダイヤよ。

歯をかんで、

母国の土を踏むまでは

千葉県 村上武士

光陰は矢のごとしとか申します。当時、中国に、夜
明けのガス灯という言葉がありました。道路の両側
に立ち並ぶガス灯が、朝霧に包まれて、ぼーっとして
いることを言います。戦後五十年近くも過ぎ去ろうと
している今日このごろ、昔のことを振り返っても、こ
のガス灯のようにぼんやりとしていて、定かではない
が、脳裏にこびりついていることのみを、かいつま
んで書いてみました。

戦雲ますます暗く立ちこめる昭和二十年七月、我が
部隊は、第一一七師団第八七旅団独立歩兵二〇三大隊
弘一四六七部隊は、満州警備の転属命令により、部隊
移動。河南省開封より、八月十日過ぎと思うが、新京
に到着したのであります。途中何ごともなく、まして
や、ソ連軍の満州突入ということも寝耳に水の状態で、
下車したのであります。

さしあたり、南新京に通ずる主要道路のソ連軍侵入
を阻止妨害するための指令が下った。道路の側面数メ
ートルおきに、タコつば穴を掘ることであった。任務
は、数時間後、新京に突入するソ連軍をフトン爆雷を
抱え、各自がこのタコつば穴に待ち伏せして、敵の戦
車を破壊するという任務のものである。トウモロコシ
とコウリヤンの生い茂る畑の中をガの大群と戦い、悩
まされ、ようやく掘り終え、十六日の午前と思うが、
中隊長が乗馬姿であらわれ、作業を中止し兵舎に引き
あげよとのことでした。隊長の報告によれば、まこと
に残念だが、この大戦は終結したとのこと。連絡ある
まで、次の指示を待てとのことであつた。